

木野川渡し場跡 木野地区をたずねる

藤池神社の伝説と木野川渡し

市域の歴史で古くから登場するのが芸防の国境の話です。飛鳥時代のこと、593年に推古天皇が即位したころ、市杵嶋姫命が、九州の太宰府から2歳の嬰兒を背負って歩いたとき、苦の坂に差しかかりました。久しぶりに瀬戸の潮風を頬に受けた姫は、安堵な気持ちになると同時に、疲れがドツと出て、

えらや苦しやこの苦の坂は

金の膝も要らぬもの

と詠んで、持っていた膝を池に投げ捨て、身を軽くして厳島にたどり着いたという伝説があります。

大化の改新（645年）以後、日本は律令国家体制に向かつてひた走りますが、国境を定めるには長い年月を要し、大竹川をもって安芸周防の国境としたのは、天平6（734）年でした。その後、安芸の国の人々は「木野川」と言い、周防の国では「小瀬川」と呼びました。一つの川に二つの名前が存在した例は、全国でも珍しいことでした。幕末、世に言う安政の大獄で、吉田松陰が囚われの身となり、江戸送りとなった際、故郷に最後の別れを告げる詩を詠んでいます。

夢路にも 帰らぬ関を 打ち越えて

今を限りと 渡る小瀬川

松陰を乗せた駕籠は、木野川を渡って安芸の国に入り、小方村の若衆に引き継がれ苦の坂を越えたと いわれています。

その後、長州の役では慶応2（1866）年6月13日に長州軍が中津原（木野村）に入り、「ここを本陣とする」と、ひざまずく庄屋の家主の前を数人が草鞋のまま上がりこみました。すでに村人は三ツ石に避難し、庄屋だけが残っていましたが、斬首を覚悟で「あなた方、いくら戦とはいえ、他人の家に土足で上がるとは何事か、脱いでください」と、震えながらハッキリと物申しました。長州軍は「申し訳ない、許せ」と言いつて草鞋を脱ぎましたが、庄屋は首を触り、やつと生きていることを確かめたといえます。身分を超えての男意気を感じる逸話ですね。



太閤振舞井戸

③太閤振舞井戸（つぼかわの井戸）

この井戸は古くからあり、湧き出る水量が多く広く生活全般に使われており、街道を旅する人々も、この井戸でのどを潤した。また、太閤（豊臣秀吉）が名護屋城（佐賀県唐津市）からの帰途、この水で茶を点てたと伝えられている。



木野川渡し場跡

①木野川渡し場跡（大竹市指定重要文化財・史跡）

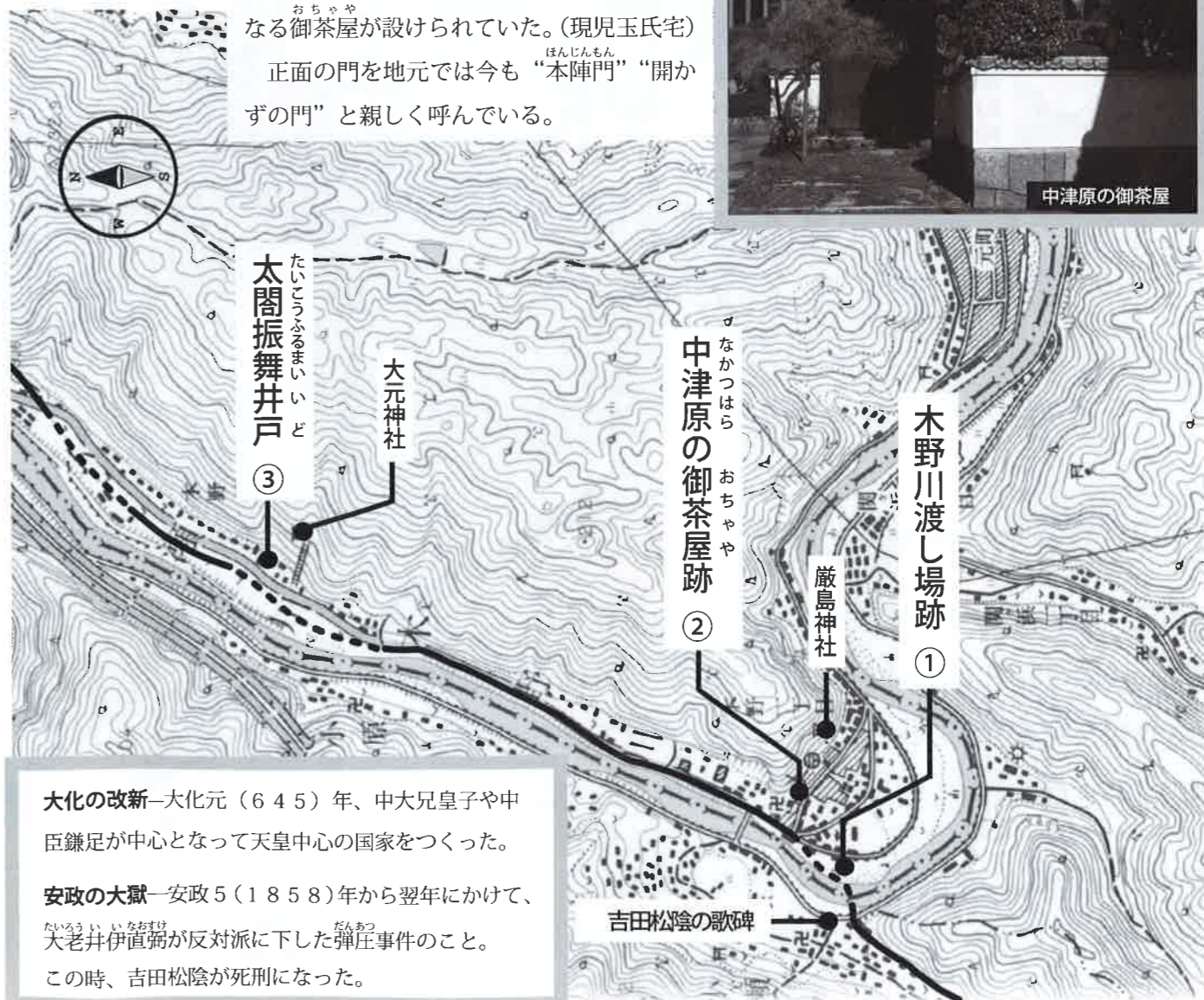
この渡し場跡は、西国街道（旧山陽道）の安芸・周防両国の境にある。当時の渡し場付近は、川幅約22m、水深は舟渡しの所で約1.4m、徒歩渡りの所で約0.7mだった。船渡しは、木野・小瀬両村から出された「渡し守」が2人1組で交代して行ない、その費用は両国が負担していた。江戸時代の終わり頃には、徒歩渡りは無料、舟渡し賃は人が2文、牛馬が4文、役人は無料だった。

②中津原の御茶屋

木野川渡し場があった中津原には、川止めなどの時に諸大名や役人などの休泊所となる御茶屋が設けられていた。（現児玉氏宅）正面の門を地元では今も“本陣門”“開かずの門”と親しく呼んでいる。



中津原の御茶屋



大化の改新—大化元（645）年、中大兄皇子や中臣鎌足が中心となって天皇中心の国家をつくった。

安政の大獄—安政5（1858）年から翌年にかけて、大老井伊直弼が反対派に下した弾圧事件のこと。この時、吉田松陰が死刑になった。



木野川渡し・木野村周辺（「行程記」部分）

木野川の向こうに木野（小野）村が描かれていて、下流には大竹村、和木（脇）村もみえる。